
『とある休日』

ジン・ココノエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『とある休日』

【Nコード】

N7894V

【作者名】

ジン・ココノエ

【あらすじ】

もしかしたらあったかもしれない、クロノとなのはの一日。ぶつちやけると「原作CPが……」という理由だけで書いた作品です。

朝のひととき（前書き）

・初めに

原作とは違う部分が多いかと思しますので、その辺ご注意を。

あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見なくても大丈夫な筈、多分。

それでも構わないという方のみ、先へお進み下さい。

朝のひとつき

ふと、目が覚めた。

時計を見れば……いつも起きる時間より、ほんの少しだけ早い時間。

隣を見れば、年齢の割りに幼く見える男性がまだ眠っている。

元々あまり朝の強くなかった私。

それでも仕事の関係もあって大分克服できたと……思う。

「……シャワー浴びてこよ」

少しフラフラする。

意識も少しだけ、ぼんやりしてる気がする。

ダメだって言ったのに……全然手加減してくれないんだもん。

思い出すのは昨日の夜の事。

久しぶりだったから、分からないでもないけど……それでも頑張りすぎだよ。

心の中で少しだけ愚痴を言って、少し温めに設定したシャワーを浴びる。

今日が休みで良かった。

こんな状態で仕事に行ったら、怖い怖い副隊長さんに怒られちゃうもん。

「……………うあつ」

見ていたのは鏡に映った自分の姿。

もう少し大きければなあと思わないでもない。

まあ、気になったのはそこではなく……………鎖骨の上、首の辺り。

首に跡残ってるう……………今気付かなかったたら危なかったよ。

今日はこの後お出かけの予定だったのに、こんなに残したままだったら……………

もう、普段はそういう処見せない癖に……………その気になると本当、底なし。

求めてくれるのは嬉しいけど……………ね。

そういえば……………髪、少しだけ切ろうかな？

大分伸びてきたし、そろそろ少し切ってもいいかな。

それが髪型変えてみようかな……お母さんみたいにするのもいいかな。

それに切るって言ったら、反対はしないと思うけど残念がるんだろっなあ……

「……………変な処で可愛いよね」

今もベッドでまだ眠ってる、愛しい人。

時々意地悪で……凄く、凄く優しい人。

私の大事な、この広い世界で一番大好きな人。

今はお互い忙しくてなかなか会えないけど、今はそれでも構わない。

でも、もしもあの人の子供を授かる事になったら、私はたぶん……仕事を辞める。

だって、私は一人の寂しさをよく知ってるから。

あの人も一人でいる事の寂しさを知ってるから、反対はされないと思う。

管理局の……教導隊。

私の夢だった場所。

今、私は四年前の大怪我で喪いかけたその夢を掴み、そこにいる。

機動六課には『出向』という形で関わっている。

でもね、今の私の夢は違うんだよ？

少し違うね……あの人と一緒になった日から、変わったんだ。

私はあの人と、あの人との子供と一緒に幸せに暮らしていけたらそれでいいんだ。

フェイトちゃんやはやてちゃんには悪いけど、私は遠くない未来……管理局には居ないと思う。

私は私だけの幸せを見つけちゃったから。

二人にも良い人ができるといいんだけど、どうかな？

高ランク魔道師、しかも階級が高い女性は婚期を逃しやすいって、誰かが言ってたからちよつと心配。

それに二人とも美人だから、ほとんどの男性が尻込みしちゃってそうだね。

良い人がいたら紹介してあげたいけど……

私知ってる良い人っておにいちゃんかユーノくんくらいだからね。

「よしっ、今日もがんばろうっ」

気持ちを入れ替える為にちょっと声を出す。

シャワーのおかげで眠気も取れたし、今朝は少しがんばってみようかな。

喜んでくれるかな？

最近は見時間を見てお義母さんやお母さんに料理を教わってる。

元々苦手じゃなかったし、教わった事をちゃんと復習もしてきたからそれなりに上達はした筈。

まだまだお義母さんほど上手くはできないけど、それも今のお話。

これから先、絶対にお義母さんを超えてみせるんだからっ！

この家の材料や包丁、調味料の位置はとっくに把握済み。

もう何度もお邪魔している家だからね。

ちなみに嫁姑の関係は良好。

『早く孫が見たい』なんて、うちのお母さんと同じ事様な事を言ってるくらいだから、関係が悪化するとも思えないかな。

尤も、うちのお母さんは正確には『早くお婆ちゃんって呼ばれたい』って言うただけ。

女性としてはあんまり嬉しくないんじゃないかなって思うわけで……まあ、人にもよるんだろうけど。

今度ヴィヴィオを連れて海鳴に帰ってみようかな。

もし引き取り手が見つからなかったら、私が引き取るつもりだったしね。

その事を相談したら、あの人も笑って了承してくれた。

ただその時の目が『仕方ないなあ』っていう子供を見る様な目だったのだけ、ちよつと納得いかない。

その事を追求しようとするのと逃げちゃうし……

私だってちゃんと大人なんだからね？

先の事だってちゃんと考えてるんだよ？

そりゃ五つも下だと子供に見えるかもしれないけど……そんな私を選んだのはアナタなんだから。

ちゃんと一人前に扱ってほしいよ。

「痛っ」

……指切っちゃった。

絆創膏はどこだったっけ？

ドジはお姉ちゃんの専売特許なのに……もしかしてこの間海鳴に帰った時に感染った？

まあとりあえず血が止まるまで……って、あら？

手が引つ張られて何か暖かい物に包まれ……た？

視線をそちらに向ければ寝ていた筈のクロノくん。

私の大事な旦那様。

「ふむ……後で絆創膏を張るように」

「あ、ありがと……くろのくん」

すぐに声が聞こえて誰か分かったけど……

指、舐められちゃった。

うう……こんな処みられるなんて、恥ずかしいよ。

大体寝てた筈なのに、なんで此処にいるの？

「ちなみに君が起きた時にはもう起きていたぞ？」

「寝たフリしてたのっ！？」

「ああ、部屋を出て行く無防備にゆれ」……むぐ」

「言わないっ、その先は言っちゃダメっ！」

叫びながら口を押さえる。

寝てると思ってそのまま出てきちゃったよ……

……今度から寝たフリしてないか、絶対確認しよ。

「もういわない？」

口を押さえられたまま、首を縦に。

全くもっ……なんでいつもああいう意地悪ばかりするのかな。

「ぷは……死ぬかと思った」

……あれ？

そんなに強く押さえたつもりはなかったんだけど？

「鼻まで押さえる奴があるか、馬鹿者」

「もっつ、元はといえばクロノくんが原因でしょっ？」

それと、馬鹿って言った方が馬鹿なんだよ？

「それでも、だ。全く昨日の夜はあんなに……」

「うわわわっ、ダメっ、言っちゃダメーっ!？」

口をもつ一回、押さえようとするけど……今度は全部避けられた。

その上で、手首掴まれて逃げられなくなっちゃった。

「別に恥ずかしがる事でもないだろう？」

「私は恥ずかしいのっ！」

なんでそこで心底不思議そうな顔するの！？

普通恥ずかしくないっ！？

「ふむ。とりあえずシャワーに行ってくる」

「さっさと行っちゃえっ」

うう、変な処で鈍いというか朴念仁というか……

変な部分だけ、うちのお兄ちゃんそっくりだよね……

自分の気持ちにはあっさり気付いたクセに、私の気持ちは全然わかってなかったし。

「ちゃんと絆創膏はっておけよ？」

「分かってますっ！」

少しだけ声が荒くなった。

その事に気付かないワケが無いのに……笑ってる。

「それとな、愛してる」

いきなり唇奪って、そのまま逃げられた。

朝のキスは少しだけ、血の味がした。

「なっ、くっ……クロノくんっ！」

今日も朝からなのは・T・ハラオウンの声が近所に元気に響いていた。

e n d .

昼のひととき（前書き）

・初めに

原作とは違う部分が多いかと思しますので、その辺ご注意を。

あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見なくても大丈夫な筈、多分。

それでも構わないという方のみ、先へお進み下さい。

昼のひととき

リビングに入ると、クロノくんは新聞を読んでいた。

ちょっと待たせすぎちゃったかな？

シャワーの時考えてた事もあって、ちょっと髪型で悩んじゃった。

その代わり、それなりの自信はある……かなあ。

「えっと……お待たせしました」

「ああ……ん？」

訝しげな表情っていうのかな。

何だろ……何かおかしい処あったかな？

一応姿見で一通り確認はしたんつもりだったんだけどなあ。

「どうかしたの？」

「否、今日は髪型変えたんだな、と」

「あ……ちょっと変えてみたんだけど、似合っていない？」

ちよつとドキドキするね。

髪型つてあんまり変えた事なかったし……

お母さんを参考にやってみただけど……どうかな？

「そんな事はないさ……ただ」

「ただ？」

苦笑してるクロノくんは、ちよつと不安になる。

やっぱり変な処あったかな？

でも今ならすぐ直せるよね？

……もしもの時はいつもの髪型に戻しちゃえばいいんだし。

「いつもより大人っぽいかな、と」

「わ、私はもう大人ですっ！」

って、言うに事欠いてソレなのっ？

うう……私だってもう子供じゃないのに。

……不安になって損したよ。

「まあ、冗談だ。よく似合ってる」

「……………あう」

最近どんどんクロノくんに勝てなくなってる気がする。

それなのに…………全然嫌な気持ちにならないし。

他の人にあんな風に言われると、凄く嫌な気持ちになるのにな。

「ほら。買い物に行くんだろう？」

「あ……………うん」

それが当然とばかりに手を引かれた。

そのまま家を出て…………少し経った頃。

「まずは服だったか？」

「……………ふえ？」

手にばかり意識がいつて、何て言われたのか分からなかった。

それに物凄い変な返事返しちゃったし…………

だからってクロノくんもそんな呆れた様な目で見ないでもいいのに。

今日は朝から調子狂っぱなし。

きつと全部クロノくんのせいだよ？

「おいおい、しっかりしてくれ。今日の買い物は君がメインだろう？」

「う、ごめんなさい」

でも、でもですね……その手がその……

「今更手を繋ぐくらいで何をそんなに照れてるんだ？」

「く、クロノくんは気にしなさすぎですっ」

前に『開き直った』って言ってたけど……開き直りすぎだよ。

む、昔はクロノくんの方がこういうのダメだったのに……

なんで今は立場逆転しちゃってるんだろ？

クロノくんに関わったのかな。

例えばうちに来た時に散々弄ばれて開き直っちゃったとか？

………うあ、物凄くありそうな展開かも。

「ふむ……嫌なら離すか」

「わっ、ダメっ、離しちゃ嫌っ！」

手を離そうとしたクロノくんの腕に抱きつく。

それでクロノくんの顔を見て……………嵌められた事に気付いた。

だってクロノくん。

物凄く…………意地悪な笑顔で私の事見てた。

「我俣だなあ」

「うう…………どうせ我俣だもん。子供だもん」

「ほら…………このくらいで拗ねるな。」

頭、撫でられた。

あつたかくて、大きな手。

撫でられると不思議と暖かな気持ちにしてくれる手。

私の大好きな、手。

「くろのくんがいじわるなのがいけないんだもん」

「仕方ないだろう？」

そう言って笑われた。

その事にちょっとむっとしないでもないけど…………

頭撫でる手が気持ち良くて、怒る気分にもなれなかったよ。

「それに、君も悪いんだぞ？」

「……………私？」

何が悪いんだろう……………教えてくれたら直すよ？

気持ちに通じた？

腕に抱きついてた私の耳元。

そこで紡がれた言葉。

私以外の誰にも届かない、そんな声で紡がれていく、言葉。

聞いている内に段々……………顔に熱が集まってく。

「く、くろのくんっ!？」

離れ際、頬にキス。

いつからクロノくんはそんな事が出来るようになったの？

って、いうか嗤うなーっ！

「さ、ちゃっちゃと行ってこようか」

「ちよっ、待って、待ってっば……………」

どうにか止めようとしても……………力の差で引き摺られる。

せめて、せめて顔の赤みが引くの待って……

「なのは」

「く、クロノくん？」

良かった。

立ち止まってくれた……………これで少し時間を稼げ……

「こついうのはな。慣れるより慣れろ、だ」

「意味分かんないよっ！？」

いきなり何言い出すの！？

絶対っ、絶対にお母さん、sが変な『教育』したんだ。

今、私が、そう、決めたっ！

明日か明後日ちょっと『お話』してこよう。

……もう手遅れかもしれないけど。

e
n
d
.

夜……というより、夕方のひととき（前書き）

・初めに

原作とは違う部分が多いかと思しますので、その辺ご注意を。

あとは……自分トコのサイトであげた短編とかは見なくても大丈夫な筈、多分。

それでも構わないという方のみ、先へお進み下さい。

夜……というより、夕方のひととき

「こんなものか？」

「後は晩御飯の材料だけ」

荷物を持ったクロノくんの問い。

それに上機嫌で答える。

朝からいろいろあったけど、買い物の方は順調に済んだ。

気に入った服もちゃんと買えたし、言う事ないかな？

「そうか……そういえば明日から戻るんだったか？」

「そうだけど？ クロノくんは？」

「どうするかな」

目の前でクロノくんが眉を寄せて悩んでる。

てつきり同じ様に明日から仕事だと思ってたんだけど、違ったのかな？

「今度の休暇って長かったの？」

「いや、さっき連絡が来てな……クラウドディアのメンテが長引いて
いるみたいだな」

「へえ、無理させちゃったの？」

「少しな、もう少し頑丈だと思ってたんだが……」

「……あ、あはははは」

「冗談のつもりだったんだけどなあ……」

新鋭艦のメンテが伸びるくらいの無理って何させたんだろ。

それに頑丈だと思ってたって事は……クラウドディア自体に損害出
てるって事だよね？

「仕方ない。明日は騎士カリムの処にお邪魔してくるか」

「カリムさん？」

ちよつと意外な名前が出てきた。

出てきたついでになんだか胸にもやもやが……もしかして。

私、カリムさんに嫉妬しちゃってる？

「ああ、たまに六課の事で話をしたり、お茶をご馳走になったりし
てるんでな」

「……そうなんだ」

そう言ったクロノくんは少しだけ楽しそう。

うう……ちょっとショック。

カリムさんとはちよくちよく会ってたんだ。

そりやお仕事だって分かって……分かっててもやっぱりダメかも。

さっきまでの気分が急に萎んできた。

「どうかしたのか？」

「な、なんでもないっ」

クロノくんが心配そうに覗き込んできた。

なんとなく目を合わせられなくて……挙動不審？ になってる。

そんな私をクロノくんが見てて、居心地悪いというか落ち着かない。

考えてた事がバレたらどうしょ……嫉妬深い女だって呆れられちゃうかな？

「ふむ………ああ、安心していいぞ？」

「へ？」

ぽんぽんと頭、叩かれた。

何のことが分からなくて、クロノくんの顔見れば……笑ってた。

「自分の居ない処で他の女性に会ってほしくない。違ったか？」

「そそそそそ、そんな事っ!？」

図星。

思いつきり図星。

「そこまでもと逆に面白いな」

「くーろーのーくーんっ!」

なんでっ!？

普段そういうの気付かないクセに、なんでこういう時ばかりっ!？

「なるほど、図星だったか」

「だーかーらーっ、違っつてばあっ!」

違わないけど、違っつて事にしておいてっ!

うう、顔真っ赤になってるよ絶対。

怒ってるんじゃないかって、恥ずかしくて。

「何、気にするな……嫉妬もされないよりはずっと嬉しいぞ?」

「人の話聞いてえええっ!」

とにかく捕まえようとして掴みかかるけど……全部避けられた。

荷物持って何でそんなに動けるの?

不公平だよ……私にもその運動神経分けてほしいよ。

でも嫉妬されるのって嬉しいんだ?

「聞してる。その上で流してるだけだ」

「……うう、最近クロノくんの意地悪がどんどん鬼畜めいていくよ」

「失礼だな……だがそうだな、そういうのは夜だけにしておくか」

「よっ、夜って……?」

夜だけ。

+

鬼畜に。

||

え？

「しかし……明日から仕事ではな」

「く、くろのくんっ！？ 何かとんでもない事考えてないっ！？」

想像しちゃったモノに顔が火を吹きそう。

ちらりところちらを見る目は……なんていつか背筋が寒くなる様な感じ。

クロノくん……絶対良くない事考えてる。

……主に私にとって、だけど。

「いや？ なのはにどうしたら悦んでもらえるかをちょっと考えてただけだが？」

「今何か発音がおかしかったっ！」

真面目に語ってるけど……けどっ、私は見逃さない。

表情が真面目だけど、目だけ笑ってる。

物凄く愉しそうに嗤ってる。

「そっか？」

「絶対こんな時間に考える事じゃない事、考えてたでしょっ!？」

「例えば？」

「えっ……って言わせないでよっ!」

こんな場所でそんな事言わせようとするっ!？

「ちっ」

「そこで舌打ちっ!？」

「ところでなには最近、絶叫系に目覚めたのか？」

「叫ばせてるのはクロノくんでしょっ!？」

うう……いい加減疲れてきたよ。

今日のクロノくん、何でこんなに意地悪なんだろ……何か泣きたくなってきた。

「ふむ？」

「なんでそこで不思議そうな顔するのっ!？」

「気のせいだろう？」

「うう……休みなのに疲れたあ」

なんで休日なのにこんな疲れなきゃいけないの？

本当なら今日はお買い物して、その後はクロノくんと一緒にのんびりするつもりだったのに。

「そうか、ならば家に帰ってゆっくりしようか」

「……………何か寒気した」

ぞわって背筋にきたよ？

ぼんぼんと叩かれる頭もいつもみたいに気持ち良くないよ？

「それこそ言いがかりという物だぞ？」

「でも絶対何か企んでるでしょ」

そこ、心外そうな表情浮かべてない。

なんとなく分かるんだからね？

ただ、それが何でか……………避けられない運命にあるのが悔しい。

「企んでるというな。疲れているならマッサージしてやろつと思っただけだ」

「……………じ〜」

「僕はそんなにも信用無かったのか…………」

疑う様な眼差しで見たのが拙かったのか……

クロノくんは遠い目をして空を見上げちゃった。

目に涙が見えて、さすがにやりすぎたと思った。

「わ、違っ、違っのっ！」

それまでからかわれてたから……

その、また嘘か冗談じゃないかって……ね？

「よし、それじゃ材料買って帰るとするか」

ニコヤカに歩き出したクロノくんの背中を呆然と見送る。

そして、その手に持った物に気付いた。

所謂　　目薬と呼ばれる、物。

「だ、騙され……た？」

e n d .

夜……というより、夕方のひととき（後書き）

……というわけで、個人的に懐かしいお話をアップさせていただきました。

ここまでお付き合い頂けた皆様に感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7894v/>

『とある休日』

2011年11月11日12時56分発行